

表 1

	指尖温度	①—⑤	②—⑤	④—⑤	①—④	②—④
8y. M.	34.9°C	2.0	2.5	0	2.0	2.5
9y. M.	30.8	3.0	2.5	-0.5	3.5	3.0
7y. F.	31.9	2.5	2.6	0.2	2.3	2.4
6y. F.	31.8以上	2.1	2.5	0.2	1.9	2.3
14y. F.	35.1	0.7	1.5	0.2	0.5	1.3
31y. M.	33.0	1.2	1.5	-0.1	1.2	1.6
26y. M.	32.9	1.8	2.3	0.1	1.7	2.2
27y. M.	35.9	0.9	1.4	-0.4	1.3	1.8
26y. F.	34.9	1.5	2.0	0.2	1.3	1.8
症例 1. I/13	35.7	1.5	2.2	0.8	0.7	1.4
14y. M. XI/16	33.6	0 ↓	0.3 ↓	0.7	-0.7 ↓	-0.4 ↓
症例 2. I/13	34.9	1.4	2.4	1.7 ↑	-0.3 ↓	0.7
7y. M. XI/16	35.0	1.5	2.1	1.9 ↑	-0.4 ↓	0.2 ↓
症例 3. XI/7	—	1.0	2.9	0	1.0	2.9
12y. F. XI/28	33.2	-0.3 ↓	1.2	-0.3	0	1.5

①: DIP と PIP の中間点, ②: PIP, ③: PIP と MP の中間点, ④: MP, ⑤: 手背低温部, ↓ ↑: 偏移の傾向

[方法]

左第3指の直線上の温度分布波形をとり、手背の温度と、指の各部位の温度を測定し、それらの温度差を検討した。また手背全体のサーモグラムパターンをも検討した。

使用機種は、日本電子サーモビューア JTG-MD、対照は6才から14才の小児5名と26才から31才の成人4名、JRA 患児3名である。室温20～25°C、15分以上室内で順応後測定した。

[結果]

測定結果は表1の通りである。

3症例とも測定時に臨床上関節炎の所見がなかったが、症例1と2ではMPでより高温の傾向があり、また症例3では右第3指がMPより末梢側が、他指に比較して1°C以上の低温を示した。

同一症例での経時変化は、ほぼ他の検査結果と平行して、対照群で得られた値より備移する傾向が得られた。

病型は、症例1と2が全身型、症例3が多関節型である。

JRA における HLA

鹿児島大学小児科 寺 脇 保
 銚之原 昌
 成 富 研 二
 川 野 好 文

I. 目的

移植免疫の研究から発展した HLA は、疾患感受性との相関が証明されて以来、免疫遺伝学的重要手段として注目を集めている。

われわれは JRA の免疫遺伝学的背景を知るために日

本人 JRA 患児について HLA-A, -B および -DR について調査をおこなった。

II. 対象

Grossman 診断基準をみたす JRA で、HLA-A, -B は JRA 27 例、対照 91 例、また HLA-DR は JRA 22

表 1 HLA-A, -B: RA Seropositivity

	Control 91		RA(+) 8		RA(-) 16	
All	15	16.5%	1	12.5%	9	56.3%

$X^2=10.18775$ $P<0.00157$ $Pc<0.0345$

表 2 HLA-DR: Total JRA

	Control 38		JRA 22	
DRW 4	4	10.5%	10	45.5%*
DRW 4×7	13	34.2%	18	81.8%**

* $X^2=7.65000$ $P<0.00584$
** $X^2=10.81137$ $P<0.00157$

表 3 HLA-DR: Subgroups in Total JRA

	Control 38		Systemic Type 14	
DRW 4	4	10.5%	6	42.9%*
DRW 4×7	13	34.2%	11	78.6%**

* $X^2=4.96075$ $P<0.02685$
** $X^2=6.41447$ $P<0.01141$

表 4 HLA-DR: RA Seropositivity

	Control 38		JRA 22			
			RA(+) 8	RA(-) 14		
DRW 4	4	10.5%	5	62.5%*	5	35.7%
DRW 4×7	13	34.2	6	75.0	12	85.7%**

* $X^2=8.28147$ $P<0.00419$
** $X^2=9.17428$ $P<0.00256$

表 5 HLA-DR: RA Seropositivity in Total JRA

	Control 38		Systemic type 13			
			RA(+) 5	RA(-) 8		
DRW 4	4	10.5%	3	60.0%*	3	37.5%
DRW 4×7	13	34.2	4	80.0	7	87.5%**

* $X^2=4.720525$ $P<0.03016$
** $X^2=5.622254$ $P<0.01796$

例, 対照 38 例につき検索した。

III. 方法

HLA-A, -B は NIH 法により Behringwerke 社製 46 種, 望星企業製 10 種の抗血清を用いて A-locus 8 抗原, B-locus 14 抗原につき, また HLA-DR は Histo-compatibility testing に準じて望星企業製 31 種血清 6 抗原につきタイピングをおこなった。

IV. 成績

1) HLA-A, -B

①JRA 全体, 女児 JRA, Subgroup では有意の抗原

表 6 HLA-DR: Sex difference

	Control 38		JRA 22			
			Female 16		Male 6	
DRW 4	4	10.5%	7	43.8%*	3	50.0%
DRW 4×7	13	34.2	14	87.5%**	4	66.7***

* $X^2=5.88741$ $P<0.01603$
** $X^2=10.7467$ $P<0.00157$
*** $X^2=6.78129$ $P<0.00964$

表 7 HLA-DR: Subgroups in Female JRA

	Control 38		Systemic Type 16	
DRW 4×7	13	34.2%	8	88.9%

$X^2=6.48370$ $P<0.01141$

表 8 HLA-DR: RA Seropositivity in Female JRA

	Control 38		Female JRA 16			
			RA(+) 6	RA(-) 10		
DRW 4×7	13	34.2%	4	66.7%	10	100%*

$X^2=11.2203$ $P<0.001$

表 9 HLA-DR: RA Seropositivity in Female JRA Subgroups

	Control 38		Systemic type 9			
			RA(+) 3	RA(-) 6		
DRW 4×7	13	34.2%	2	66.7%	6	100%*

$X^2=6.6564727$ $P<0.01079$

はなかった。

②JRA を RA テスト反応性で陽性群 8 例, 陰性群 16 例に分けてみると, 陰性群で All の有意の増加を認めた。 $(X^2=10.18775$ $P<0.00157$, $Pc<0.0345)$ (表 1)

2) HLA-DR

①JRA 全体では DRW 4×7 ($P<0.00157$) および DRW 4 ($P<0.00584$) の有意の増加を認めた (表 2)。

②JRA 全体を Subgroup にわけて対照と比較してみると, 全身型で DRW 4×7 ($P<0.01141$) および DRW 4 ($P<0.02685$) の有意の増加を認めた (表 3)。

③JRA 全体を RA テスト反応性で陽性群 8 例, 陰性群 14 例に分けてみると, 陽性群で DRW 4 ($P<0.00419$), 陰性群で DRW 4×7 ($P<0.00256$) の有意の増加を認めた (表 4)。

- ④JRA 全体で Subgroup と RA テスト反応性を組みあわせて検討してみると、全身型 RA(-) で DRW 4×7 ($P<0.01796$)、全身型 RA(+) で DRW 4 ($P<0.03016$) の有意の増加を認めた (表 5)。
- ⑤JRA 全体を女兒 16 例、男児 6 例にわけると、女兒で DRW 4×7 ($P<0.00157$) および DRW 4 ($P<0.01603$)、男児でも DRW 4×7 ($P<0.00964$) の有意の増加を認めた (表 6)。
- ⑥JRA 女兒 16 例を Subgroup にわけると全身型で DRW 4×7 ($P<0.01141$) の増加を認めた (表 7)。
- ⑦JRA 女兒例を RA テスト反応性で陽性群と陰性群にわけると、陰性群で DRW 4×7 ($P<0.001$) の有意の増加を認めた (表 8)。
- ⑧JRA 女兒 16 例で Subgroup と RA テスト反応性を組みあわせて検討してみると、全身型 RA(-) で DRW 4×7 ($P<0.01079$) の有意の増加を認めた (表 9)。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 目的

移植免疫の研究から発展した HLA は、疾患感受性との相関が証明されて以来、免疫遺伝学的重要な手段として注目を集めている。

われわれは JRA の免疫遺伝学的背景を知るために日本人 JRA 患児について HLA-A、-B および-DR について調査をおこなった。